

茅 風



— Breeze from the field of thatch-grass —

2023年11月5日
森林塾青水
事務局便り
茅風通信 70号

新しい標柱に、歴代塾長が揃い踏み(8月19日)

目 次

■ 6月～10月の活動報告(事務局).....	1
■ 2023定例活動②.....	2
「森林整備でリトリート」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 2023 定例活動③.....	3
「防火帯刈払い」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 2023 定例活動④.....	4
「夏の上ノ原生き物調査」	
◆開催報告(草野 洋)	
■ 2022定例活動⑤.....	6
「ミズナラ林整備とススキの種採集」	
◆開催報告(稲 貴夫)	
□ 藤原だより(北山 郁人).....	7
■ こもんずの広場(笹岡 達男).....	8
編集後記	

2023. 6～2023. 10の活動報告

【6月】

- 17日、18日 「森林整備でリトリート」実施。参加者20名。林の一部を間伐。2014年から2018年にかけて試験的に皆伐した40メートル四方の斜面に、その後生育してきた木を取捨選択しておこなったもの。

【7月】

- 7日 「茅風」69号発行
- 15日、16日 「防火帯刈払いと歩道整備」実施。参加者13名。翌年の野焼きに備え防火帯を整備。

【8月】

- 19日、20日 「生き物調べ」を実施。当塾を支援してくださっているイオン環境財団からの3名を含め、16名参加。貴重種も調査するとともに、鹿柵を設置。夜の車座講座では、北山塾長がこれまでの活動を振り返り、続いて「日光茅ボッチの会」の飯村さんが両フィールドを比較、最後に西村幹事が上ノ原の生物について解説。

【9月】

- 特記事項なし

【10月】

- 4日、5日 筑波大生命環境系で研究中の院生がフィールドにて植生・土壌を調査。

- 7日 「草原と森の再生プログラム」実施。参加者16名。茅穂の刈取りおよび一部での間伐を実施。摘み取った茅の穂は、地元での採取分とあわせ、がけ崩れ傾斜地などの緑化事業者に納入予定。
- 18日 茨城県霞ヶ浦環境科学センター小幡和夫先生他1名が、上ノ原の希少植物を視察するために来訪。
- 24日、25日 麗澤中学一年生の奥利根水源の森林フィールドワークを上ノ原で実施。青水関係者14名がインストラクターとなり、上ノ原で実施。5クラス計148名の生徒たちに、自然観察や目隠しトレイル、茅刈りなどを指導。(次号で詳細を報告)
- 28日、29日 会員・会友22名が参加して茅刈りを実施。二日間で137ボッチの成果。車座講座は、東工大の平尾しえなさんが、全国行脚による、各地の茅刈り現場の特色について解説。(次号で詳細を報告)

紅葉の上ノ原
10月25日撮影

(以上)

■2023定例活動②

「森林整備でリトリート」

報告 草野 洋

6月17、18日、梅雨の晴れ間をぬって「森林整備でリトリート」を実施した。

青水が「リトリート」を本格的に取り入れたのは、2021年10月初旬のプログラムであった(『茅風通信』No.64:2021. 11. 20 発行)。この時はキノコの駒打ちを取り込んだ体験プログラムを実施したが、初めてのリトリート体験がとても新鮮であった。その後、茅場整備にどのように組み込むかを試行錯誤してきたが、今は定例プログラムとして定着している。



この時季の上ノ原

リトリートを組み込むにあたっては、「汗を流して楽しむ」という従来の活動内容と変わってしまったと捉え、違和感を持つ常連の参加者も出ている中、いかに茅場整備と融和させるか、企画の段階から以下のように幹事会で検討した。

○リトリートについての考え方

- ①目的・条件にあえば、どこでも、誰でも、なんでも、取り組める。
- ②リトリートのプログラムは進化する。
- ③社会的貢献が大きく、今後広めることが求められ、将来性もある(今がやるとき)
- ④リトリートとは自分を見つめなおし、取り戻す機会を持つことであり、そのためのコーチングメニュー(導入アドバイス)が大事な要素である。

○塾の活動に組み込む要点

- ①メニューはハード系(森林整備など)、ソフト系(散策など)の双方を取り入れ、結果的に茅場の整備につながるものが望ましい。



- ②活動の一環であり、リトリートを主体とはしない。
- ③参加者が活動に参加する目的を満足し次の活動に繋がること

そこで今回は、従来の塾スタッフが伐採を行い、それを少し体験するだけでなく、実質的な森林整備になる

写真上: 広場でコーチング1日目 下: 木陰に座りコーチング2日目

「皆伐一天然更新」跡地の「除伐」を組み込んで、「森林整備でリトリート」とした。このメニューは、日頃青水の茅場・森林整備を経験した参加者や塾のスタッフがいるからこそできるハード系であり、本来のリトリートとは違った形になるが、コーチスタッフのお二人に快諾いただいて実施した。



コーチングスタッフ

今回、除伐した区域は、会員でもある増井ドクターが、二次林を皆伐した後の植生の遷移を研究するため、2014年に設定した「増井試験地」。皆伐から9年間を経て順調に更新・生育し、藪状態となつていところを、事前に増井さんの承諾を得て、ミズナラ、クリ、イヌエンジュ、ミズキ、イタヤカエデなどのカエデ類、クロモジなどの有用な広葉樹を残し、ヤマウルシ、タニウツギなどの不要な広葉樹と根曲がりや被圧された形質不良な樹木を伐り除く作業を、手ノコを使って実施した。専門用語で、天然更新を人の手を入れて良い山にする「除伐Ⅱ類」と言われるもの。私も現役時代に数か所で経験した程度で、通常的人工林除伐と異なり、目的樹種を選別して残さなければならないので、かなりむづかしい作業である。



写真 上の段

左: 除伐前

中: 選木中

右: 除伐中

写真 下の段

左: 除伐後

右: 除伐後

下の写真: オオヤマザクラの植栽



今回の活動には、山仕事は初めてで、かつ初参加の団塊世代の女性2人、看護師の女性2人(2日目のみ)含む20名が参加して、ほぼ初めてであろう天然更新跡地除伐に挑戦した。

また、今回の活動では、十二様の前にオオヤマザクラを植樹しようと上ノ原で山取苗を

探したが余り良い苗はなく、ようやく見つけた根萌芽を根ごと掘り出し植えたが果たしてつくかどうか。(その後の観察で、根付いた模様)

尾島幹事がフェイスブックに投稿したリトリートを取り入れた作業の様子と感想を、一部修正して、下記に掲載します。

《森林整備でリトリート》

- ・リトリートを森林整備の始まりと終わりに取り入れる。
- ・リトリートは日常から離れ自然の中で自分を見つめる 取り戻す.....
- ・リトリートをリードする人の指示の下、その時の感覚を言語化し参加者と共有する。
- ・言語化する事によって、その感覚がはっきりし記憶にも刻まれ易くなる。
- ・本来のリトリートはそれを一日中、または二日に渡って行う。
- ・今回の森林整備の場所は皆伐後の変化を観察している斜面の半分、既に高さ3～4mになっているもの その間を埋める様々な木々、そこをかき分けもぐり込んでのボサ刈り。
- ・残すのは主にモミジ、ミズナラ、コナラ等、モミジは特に多く、種をびっしり付けて元気なので、多少間引く。タニウツギはピンクのきれいな花が咲くが、丈夫で茅場に入り込むと面倒だから切る。ヤマウルシも多く、赤い葉柄が目立つが、カブレが怖く触らず。
- ・図鑑で見た事のある葉を見つける、5枚複葉で、対生、アオダモと知る。
- ・作業中は目の前の判断のみ“切るか切らないか”“どう切るか”『無心』に身体を動かす
- ・前後にリトリートを取り入れたせいか『無心』がより際立ったように思う。普段は感覚を言語化する事はないから？

(尾島キヨ子)

追記(草野)

除伐した林地にはたくさんのオオバクロモジが生育していました。これは小さい物でも残して日当たりを良くしましたので、ここは下層木がクロモジの林になる可能性が大きいと見ました。この作業を続けてクロモジ採取地(クロモジ畑)にしてアロマオイルなどの製品を作りましょう。

実を沢山
採らせた
ヤマゲタ



■2023定例活動③

「炎天下の防火帯刈払い」

報告 草野 洋

梅雨が長引く年は、恒例の防火帯刈払いは雨の中の作業となる。しかし、今年は雨が少なく、炎天下での作業となった。

防火帯刈払いは、春の野焼きをより安全に実施するための夏の必須作業である。この時季に刈ることによって草の成長が押えられ、植生が少しずつ変化(衰退)するため、恒久防火帯としての役目を果たすようになり、火入れ前の防火帯切り作業もやりやすくなる。刈った草は腐り、持ち出しは不要。上ノ原で野焼きを行う上での、特有の作業となっている。

今年は13名(刈払機使用初体験者2名)の参加、標高1000m以上とは言え、強い日差しを遮るものがない草原であり、気温は35度近い。エンジン式、充電式あわせて8台の刈払機を駆使して、大汗をかきながら、恒久防火帯と歩道の刈払いを行った。

1日目は、じりじりと照りつける日差しの中で、刈刃の取り換えや刈り払い機の調整に時間を要したこともあり、一部を残して4時半に作業を終了した。この間、残りの参加者は、外来種の抜き取り作業に汗を流した。

2日目は、昨日の刈り残しを1時間ほどで完了させ、その後、全員で貴重種の調査を実施した。また、残った時間で、どぶ臭くなった池のヘドロの掻き出しや、未経験者に、刈払機の使用法の指導した。

今年のススキは、今のところ順調に生育している。貴重種は花が咲き、昨年より2割程度ふえているが、光が足りないので、その対策が必要と思われる。

ヒメシジミは個体数が少なく、楽しみにしてた乱舞は見られなかった。推測の域を出ないが、ヒメシジミは3～4年ごとに大発生するのではないかな。これも正確に記録してゆく必要がある。

全体的には、他の草花も例年より少なく感じたが、スズサイコの花を見ることが出来た。8月により詳しく調査するが、茅場の整備開始20年となる来年に、本格的な植生調査を計画したい。

6月に植栽したオオヤマザクラは、何とか活着してくれそうだ(写真:右)。



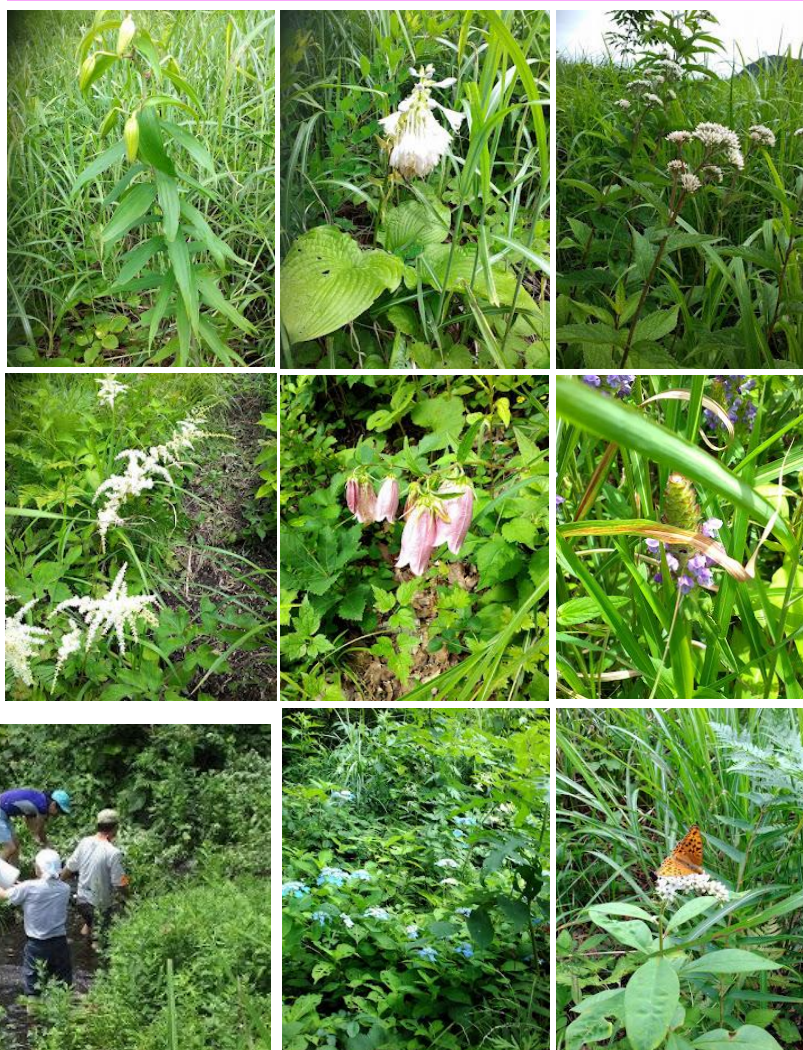
この時季の上ノ原



刈り払いの様子など



上ノ原で見つけた草花



上は、池の
清掃

左は、刈払
いの成果

草花の名前(写真と同じ並び方)

- ヤマユリ ◦ギボウシ ◦ヨツバヒヨドリ
- トリアシショウマ ◦ホタルブクロ ◦ウツボグサ
- ヤマアジサイ ◦オカトラノオと
キマダラヒヨウモン

■2023定例活動④

「夏の上ノ原生き物調べ」

報告 草野 洋

基本的には8月の活動は休みですが、今年度は8月19日、20日に植物中心の生き物調べを実施しました。

森林塾青水が上ノ原の茅場再生に着手したのが2004年で、来年は20年目になります。これまでに何度か生き物調査を行っていますが、ようやく入会地として利用されていたかつての茅場らしい状態になったことから、20年目に専門家による本格的な生き物調査を実施する方向です。そこで、来年に向けて、会員でもその一端が担えるようにプレ調査を実施することになりました。

今年の夏は異常な暑さが続いており、「命に危険が及ぶ暑さ」とか表現されるほどです。また雨も少なくダムの貯水量も減少し続けております。その暑さのど真ん中、上ノ原は標高1,000m以上ですので、気温は都心よりも5℃程度は低いはずが、下界が熱ければ天上も暑く、日の当たるところでは、動きも緩慢にならざるを得ません。今回の参加者は親戚から話を聞いて興味を持ち、初めて参加した女性、そして会の活動を支援していただいているイオン環境財団の3名の参加者を含めて16名、それぞれ、草花と涼を求めて参加していただいたようです。

1日目の到着後、雷鳴が轟いて、雲行きが怪しくなり、そのうちかなり強く降り出しました。しばらく西村さんがテントの中で、上ノ原の植物について事前の解説をしていると、雨が小降りになってきたので、茅場をひとめぐりしながら実際の植物で解説



をしていただきました。(写真・左)

そして、期待していた貴重種のおオナンバンギセルを見つけることができました。自らは光合成

をせずススキなどのイネ科植物の根に寄生している不思議な植物で、ススキの陰でうすい紅色を帯びた花が咲いていました。



オオナンバンギセル
左下は、これも貴重種のスズサイコの花

夕食後の車座講座はとても充実したものになりました。まず、北山塾長の森林塾青水のあゆみとこれからめざすもの、次に日光カヤボッチの会の飯村さんの土呂部草原の地形、気候植物、活動の特色、上ノ原との違いなど、そして締めが西村さんの上ノ原の生き物たちです。いずれもパワーポイントを使いながらの説明はわかりやすい内容でした。この夜予定していた星空観賞会は曇り空のため残念ながら中止となりました。

2日目、朝から太陽がジリジリと照りつけ、気温はたぶん32度ぐらい。まずは全員で林道わきをルートセンサスしました(※同じルートで動植物の数などを定期的に調査すること)。対象はアザミの種類とヒメジオン、シンボル昆虫のヒメシジミです。この



ルートセンサス風景

調査は継続して実施しています。

今年はヒメシジミが少なく残念ながら7月にも乱舞を見ることができませんでした。

ススキの生育は夏に雨が少なかったせいか、順調とは言えず、やはり季節は1~2週間ほど早くなっているようです。そのあと、貴重種Mの個体数を調査し、周りをシカ柵で囲む作業を汗だくで行いました。(写真・上)



やはりこの暑さ、体力的に長く続けることは危険なのでプログラムはここで終了、残り時間を岡田さんの野点をいただいたりして過ごしました。以下、今の季節の上ノ原の草花たちです。



草花の名前 (写真と同じ並び方)

- ・ツリガネニンジン
- ・ヤマハギ
- ・ノハラアザミ
- ・ハバヤマボクチ
- ・オトコエシ



■2023定例活動⑤

「草原と森の再生プログラム」 産地崩壊緑化用のススキの種を採集 報告 稲 貴夫

二、三日前から急に寒気が押し寄せ、山々はまだ緑でも、上ノ原のススキ草原はすっかり秋の気配。10月7日、8日の「草原と森の再生プログラム―ススキの種採集とミズナラ林整備」のプログラムには、地元2名を含む会員会友16名が参加しました。

初日は生憎の雨、ススキの穂は乾燥した状態で提供しなければならなかったため、作業を急遽、翌日実施予定の森林整備に切り換えました。

北山塾長がチェーンソーによる伐採の手順を示しながらミズナラを伐採、参加者は各自ノコギリを手にミズナラ等の伐採木の枝葉を伐る作業に従事しました。(写真・下)



枝葉の処理が一段落ついたところで作業を切り上げ、「藤原ぼん展覧会」を見学するため。集古館に車で移動しました。

トチやホウ等の落葉樹が豊富な藤原では、昔から木地師が様々な木製の生活用具を製作していましたが、それを「藤原盆」と呼びならわしていたということです。

かつては利根郡内の各家々で使われ、時には献上品にもなっていた「藤原盆」ですが、生活様式の近代化とともに、いつの間にか藤原盆の制作技術も途絶えつつあります。そうした中、その真価を再認識しようと結成された「藤原盆研究会」が、この展覧会を主催しました。

放射状についた鑿の削り跡が藤原盆の特徴ですが、大きなこね鉢から小さな丸盆まで、大きさも形状も様々で、中には注ぎ口のついたものまであります。参加者は藤原の歴史を伝える生活用具にしばし見入っていました。



上 集古館入口
右 展覧会パンフレット



今回の宿は、公式行事では初めてお世話になる大沢荘。草野事務局長が風邪をひき不参加の為、車座講座は中止となりましたが、参加者は秋の夜長を満喫しながら、明日の作業に備えていたようです。

二日目は朝から快晴で、絶好の穂刈り日より。それぞれハサミを持って、ススキの穂の刈り取り作業に取り組みました。

初めて実施した昨年の反省事項は、
○茎は不要なので、茎は3センチメートル以内でカットすること、
○なるべく、茅刈りに適しない区域で、二人以上で作業すること、等々。

ハサミでカットして、腰からぶら下げた土嚢袋にいれるという単純な作業ですが、作業に熱中すると、いつの間にかお互い離れ離れになってしまいがちです。また、土嚢袋でなく、通気性の良い洗濯ネットを使うなど、それぞれ工夫しながら作業に取り組みました。

11時頃まで二時間作業したところ、採れた量は11名で生重量約11キログラムほど。今年度目標の乾燥重量30キログラムには遥かに及ばないことから、昼食後、午後1時半頃までもうひと踏ん張りして、何とか合計15キログラム以上を確保。古民





家の居間にブルーシートを広げて乾燥させ、後は北山塾長以下自伐林業グループに託して、藤原を後にしました。

ススキの種の採集は今年で二回目。草原としての上ノ原の価値を高めてゆくために、さらに試行錯誤を重ねて、来年に臨みたいと思います。



左 シートごと茅穂を車へ
下 古民家で広げて乾燥



付記 茅穂は東京の種苗会社に納め、生物多様性を配慮した関東一円の山地崩壊地等の復旧(復旧)に郷土種として航空緑化等で播く種子となります。



10月初旬の上ノ原

藤原だよりー現地事務所報告ー ミズナラ間伐材の原木舞茸

北山 郁人

今年もミズナラの間伐材を使った原木舞茸が収穫できました。

通常、スーパーで売られている舞茸は、おが屑を使った菌床栽培で、一年中生産されていますが、この原木栽培の舞茸は、直接丸太に舞茸菌を植え付けることにより、天然物に近い香りと味わいを楽しむことが出来ます。9月中旬からの3週間程度しか収穫が出来ない貴重な舞茸です。しかし、今年は、夏の暑さと9月の高温で、舞茸の発生が通常より2週間ほど遅れました。舞茸は、気温が下がってくると発生する性質があるようです。

毎年、仕込み量を増やしているので来年から皆さんにも食べていただけたと思いますので、楽しみにしててください。

今年の最大の舞茸は、5kg ありました。



作業の
合間に

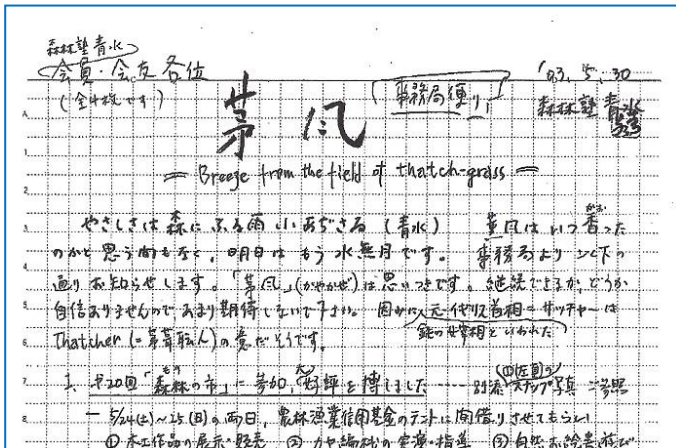


ハカリの針が
目盛版を一回転



「こもんずの広場」開設のお知らせ(第1回) —果たしてどうなることやら!!—

この「茅風通信」の歴史をご存じの方は、どのくらいいらっしゃるでしょうか？ 実は私の手元には、2003年5月30日の日付が記された「茅風」(事務局便り)というわずか3ページ、すべて手書きの文字で綴られた資料があります。これが今回「70号」を数えることとなった茅風通信の創刊号なのです。(現在青水のホームページでご覧になれるバックナンバーは第4号からですね。第4号からPCによるデジタル化!!が成ったのです。)



茅風創刊号(2003.5.30発行)の第1頁上半分

創刊号の題字とその下にある「Breeze from the field of thatch-grass」の文字は、手書きそのままの形で現在も茅風通信の表紙を飾っています。

ページを繰ってみると、4号ないし5号からは、「編集後記」の文字が見え始めます。編集委員は、初代塾長の清水英毅さんのほか草創期の青水を支えて下さった海老沢さん、浅川さんでした。毎号最後に(青)という署名があり、これは誰が見ても清水さんのペンネーム？ということがわかります。

編集後記は毎号拡大を続け、第10号(2004年7月)には遂に「塾長のつぶやき」というタイトルがつき、名実と共に清水塾長の連載コラムの始まりだったとも言えましょう。

その後18号(2006年7月)からは巻末のほぼ1ページを充て、写真入り、俳句入りとなりました。おそらく毎号このコラムを楽しみにされる会員・会友も増えていたに違いありません。こうなるともう止めるわけにはいきません。2014年4月の総会で、10年以上務めた塾長を後進に委ねられた後は、「野守のつぶやき」(2014年5月第42号から)に衣替えして、「茅風通信」の不動の連載が続いてきました。森林塾青水の20年の歴史がこのページに凝縮されていると言っても過言ではありません。

ところが、前69号(2023年7月)野守のつぶやき25号は、創刊号から数えれば丸20年の歴史を経て突然店終いを宣言されました。私も含め、長年本コラムに慣れ親しんできた読者の落胆は如何ばかり

かと思うのみです。しかも前号の編集後記(稲編集長)には、なんと新店舗の開店まで宣言されているではありませんか。

もちろん清水前店主から「とにかくよろしく!!」と耳打ちはされたものの、清水さんがお一人で、上ノ原はもとより縦横無尽に訪問された各地の話題や、豊富な識見・人脈を駆使して編んでこられた内容と同じような品揃えは、私にはできるべくもありません。そこで、笹岡は新しいページの幹事役を行うが、執筆は持ち回りにしましょう、という条件でお引き受けすることになりました。折しも東京・国立の某所では、同じ店舗を毎日違う店主が店開きする「日替わり商店」が流行っている由。「これだ!!」と思った次第です。

幸い青水には、草創期より、色々な立場から



日替わり商店カレンダー(東京・国立)

塾を応援する「顧問」と呼ばれる方々が複数いらっしゃいます。何人もいるので、「顧問's=コモンズ(上ノ原の合言葉)ですね」といつも洒脱な川端さんが言われていたのが忘れられません。その川端さんも清水さんも、今や「顧問's」のメンバーです。こうした方々に折に触れ登場していただけるなら「日替わり商店」も繁盛間違いなし!! そしてこの目論見を更に拡大し、「顧問」に限らず青水に新しい風を吹き込んで下さるような方を見つけては出店をお願いすれば、幹事役は帳場で居眠りしているという姿も夢ではありません。そんな横柄な考えも隠し持って店名を「こもんずの広場」とし、ささやかながら開店したいと思います。(誰でも出店可!!)

今回は裏話ばかりで、商品が何一つ並んでいないことに気がつきました。時代の変わり目のことゆえ、ひとえにお許しいただければ幸いです。つぶれないように頑張ります。(笹)

編集後記

今号より、初代塾長の清水顧問が9年間、25回にわたり連載された「野守のつぶやき」に代わり、笹岡顧問主宰の「こもんずの広場」がオープンしました。これから大勢の皆様がご来場くださることを期待しています。

来年は、上ノ原で青水の活動が本格始動してから二十周年の節目の年です。人間で言えば一世代に当たりますが、これまでの歩みを振り返り、その成果の上に、次に繋がる新しい一歩が踏み出せるよう、『茅風』も進んでゆきたいです。(稲)